

若い世代が担う里山と山村地域の再生

名古屋大学大学院環境学研究所 教授 高野 雅夫

皆さん、こんばんは。今若いお二人からとても素晴らしいお話を聞けました。どちらも山深い山村の話ですけれども、こういう所で若い人たちが活躍しています。僕も若いころ田舎から名古屋に出てきたわけですが、僕らの頃は都会に新しいものとか、本物とかいいものがあつたんですね。ところが今は逆に、田舎のほうにこういう素晴らしいもの、新しいもの、確かなものがある。そんな時代になってきたなと思って、今お二人の話を非常に感慨深く聞きました。「里山資本主義」という考えは、要するに、どのようにして里山の資源を生かして暮らしを立てていくか、ということになります。今日、僕は、それを一体だれが担うかということについて、お話ししたいと思います。

里山というのは次のようなものです。小さな山があり、ふもとに集落があり、低い所に田んぼがある。この三つのセットが里山という景観で、今では英語でS A T T O Y A M Aと言

うようなことにまできています。ところが、高度経済成長の時代、日本全体が都市化する中で、過疎・高齢化が進み、里山は荒廃していきました。いわゆる里山の「山」というのは写真1のようなものを言います。春の山桜とナラの木、ドングリの木の若葉が出ており、非常に多様な植物が生えています。こういう落葉の広葉樹の林が「山」です。それから谷筋には段々になって棚田ができていて、ずっと谷筋に田んぼが入っていて、ずっと谷筋に田んぼが入っています。谷戸田とか谷津田と言いますが、これが典型的な里山の姿です。この広葉樹は二〇年くらいの間隔で伐つて、それで炭を焼いていました。その枝葉の枝のところは、自分の家で燃料として使い、いいところは炭に焼いて都市に出荷して現金を稼いでいた。それが高度成長より前には、どこにでもある風景でした。

ドングリの木は、木を伐ると勝手に切り株からわき芽が出てきます。わき芽はたくさん出てきまして、

二〇年たつと元の大きさに戻ります。これが「里山資本主義」の「資本主義」の部分なんです。つまり、自然の力で勝手に育っちゃう。自然が元手なんです。その育つたものを収穫して人間が活用する。で、また自然がこうやって元に戻してくれる。再生可能資源というのは、ものすごくもうかります。木は太陽の光があるから育つのですが、太陽の光はただですから、種を植えたり苗木を植えたりしなくても、切り株から勝手に芽が出てきます。これを萌芽更新というんですが、気が付いたら木がまた元に戻っているんです。こうした循環をうまく活用していたのが、日本の里山だと言えます。



新緑の落葉広葉樹林
Broad leaf deciduous tree forest

写真1 新緑の落葉広葉樹林

いろいろな物質の循環もそういう中で起きています（図1参照）。大気中のCO₂を広葉樹が吸って幹を作り、それを村の人たちが伐って、薪にして自分たちで使う。それから、炭に焼いて都市に持っていく、そこで燃やされて二酸化炭素になって、またここに戻ってくる。そういう循環があります。それから大気中の窒素ですが、それを微生物が固定して草が生えます。その草を刈って牛にやって、草と一緒に堆肥に積んで、それを農地に入れて米を作り、住民が食べて、うんちやおしっこになり、それがまた堆肥になります。それから都市に作物を出荷し、それを都市の人が食べて、うんちやおしっこになり、それを農家が肥料として回収してくる、そういう循環があったわけです。この循環をやるのは、結局人間です。人間が木を伐るということで、物質が循環していきます。草を刈るということで回っていきます。このように里山では、生態系と人間のコミュニティが一体になっています。それが、今世界から里山が目されている理由なんです。

しかし、高度成長の時代にそれは大きく変わってしまいました。都市人口と農村人口を比較しますと、一九〇〇年の初頭の頃、今から百年前、八割の人は農村に住んでいま

た。二割の人しか都市に住んでいませんでした。それから徐々に都市人口が増加して、都市人口と農村人口がちょうど同じ数になったのは一九五〇年代です。そこから日本は高度経済成長で、その二十年の間に都市人口が急激に増えて、農村人口は急激に減って、比率が逆転してしまっています。僕自身が高度経済成長期の一九六二年の生まれですが、僕は山口県のいなかで生まれ育ち、名古屋大学に入学するために名古屋に来てこちらに移り住みました。そういう人口変動、都市化が起きたのです。さらにもう一つ、エネルギー革命というものが起こります。日本

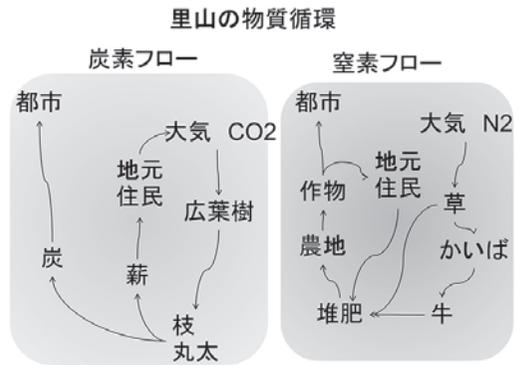


図1 里山の物質循環

一九六〇年代に非常に増えました。何が増えたかという点、石油が増えたのです。一八八〇年当時、日本人のエネルギーの八割は薪や炭でした。それが石炭に変わり、戦後石油に変わっていきませんが、薪や炭の利用は高度経済成長期まであるんです。そこで最終的になくなります。要するに一九六〇年代に石油の時代になると、薪や炭の利用は終わるわけですから、炭を焼いても売れなくなってしまいます。

こうして、先ほどの物質循環も変わってしまいました（図2参照）。石油が都市だけでなく、田舎にも入ってきます。田舎も台所はプロパンガスになります。プロパンガスというのは石油から作るガスです。石油は中東から運んできますから、こうなるともう木を伐る理由がありません。木を伐らなくなりますから、この循環が止まります。

それから、農業のやり方も変わりました。化学肥料が入ってきます。それから耕耘機も入ってきます。すると、牛はもういらなくなる、堆肥もいらない、となります。すると、草を刈る必要がなくなります。草を刈らなくなると、この窒素の循環も止まってしまいます。今までの生態系の方が全く変わってしまうわけです。すると、土地利用も変わります。

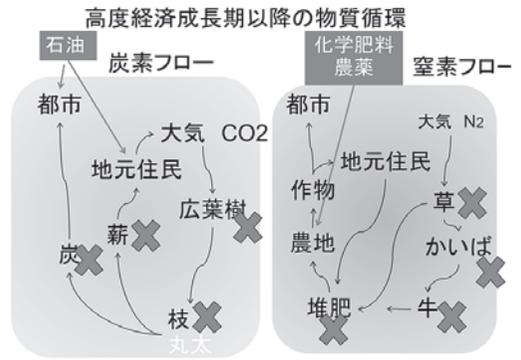


図2 高度経済成長期以降の物質循環

豊田市の足助のある地区の土地利用を例にとりますと、一九四七年、戦後すぐには、谷筋にまだ田んぼがありました。これずっとみんな谷筋なんです（写真2参照）。細い谷筋にも田んぼが入っている。これを谷戸田、谷津田と呼びます。また草地がたくさんありました。みんなこの草を刈って牛にやって堆肥にして、農地に入れていた。他に広葉樹の林があり、ここで大体二十年に一回皆伐して、炭を焼いていました。まさに典型的な里山の土地利用であり、景観と言えます。

それが一九七八年になると、耕作放棄地になってしまいます。狭い谷筋の日当りの悪い所から耕作放棄さ

Paddy fields along narrow valley
谷戸田
谷津田



写真2 谷戸田、谷津田

れていきます。一九九七年になりますと、草地は全くななくなっています。それに替わって、スギやヒノキを植えた人工林が非常に増えます。たとえば、もともと田んぼだった所がスギ林になるといような形で、全く景観が変わっていいてしまいます。今はどうなっているかというと、耕作放棄された谷筋の田んぼは、スギの林になっています。また田んぼの両側の斜面はもともとは草地だった所ですから、非常に開けた風景があったはずですが、今は鬱蒼と木が茂って、田んぼは木のせいで日当たりが悪くなっています。

人工林というのは、一見外から見ると緑がいっぱいで非常にいいのですが、一步中に入ってみるとこんな状態です（写真3参照）。柱や板を取るために、真つすぐな幹を育て

たくて、最初は密に植えます。一・五メートル間隔ぐらいで苗木を植え、お互いに光を求めて上へ上へと成長させて、真つすぐな材を作るようにします。これは江戸時代の吉野地方で開発された方法で、それを戦後みんなまねたのですが、時々間伐しないと駄目です。ところが、この林は全く間伐されていない。すると、樹冠が閉じて、太陽の光が下に当たりませんから、草すら生えません。一見緑でいいんですが、一步入ってみると砂漠のような風景になっていきます。生物多様性という観点からいうと、非常に多様性に乏しい生態系になっています。斜面にヒノキが生えています。根っこがむき出しになっています。草が生えませんが、大雨が降ると土壌が流れてしまい、根っこがえぐられて出てきてしまうのです。そして、もつとすごい豪雨になると崩れてしまいます。他方では、竹がどんどん浸食して生えてくるという事態も生じています。

一方広葉樹のほうも、大体昔は二〇年に一回ぐらい伐られていたもので、平均すると樹齢一〇年ぐらいの木があったわけです。一〇年の木なんて大した大きさではないです。だから昔の広葉樹の森というのは、すかさずのまばらな森でした。ところが、五〇年ぐらい前からもう切らな

くなつてしまいました。どうなるかという、大木になるわけです。今の日本のいわゆる雑木林では、ドンダリの木がひと抱えもあるような大木になっています。そういう森は多分縄文以来これまでなかったと思います。そういう所にナラ枯れという被害が生じています。カシノナガクイムシという虫が入って枯れるわけですが、この虫は別に外来種ではありません。昔から居た虫ですが、幹が太くなることによって、幹が虫の団地になってしまふ。たくさん虫が入って、爆発的にその数が増え、ひどいナラ枯れを生じさせています。昔はあり得なかったような被害が起きているわけです。

それから竹林。昔は農家の裏に二



写真3 管理されない人工林

三本生えていただけだと思えます。中国の植物をわざわざ道具として使うために植えたわけです。しかし、五〇年前から竹のいろんな材料が使われなくなりまして、プラスチックや金属製品になります。そうするともう竹を伐る必要があります。ほっておくと、地下茎を伸ばして竹はどんどん広がっていきます。放置すると一年間に五メートル伸びると言われています。一〇年たつと五〇メートル。二〇年ぐらい放置すると、山全体が竹林になってしまふ。竹は一年で周りの木の光を奪ってしまうほどの高さで成長し、木は枯れてしまします。そこで、どんどん竹林が広がっていく。これを竹害といいますが、外来種によって生物多様性が損なわれるという典型的な事例です。このようにいろいろな問題が生じていますが、その中心にはやはり過疎、人口減少、少子高齢化、若者が居ないという問題があります。そうした人の動きのせいで、自然がこんな姿になってしまったわけです。そういう中で、今、お二人の話の中にあつたように、いろんな取り組みがされています。これは豊田市のある地域の中にできた公共施設で「すげの里」と言います(写真4参照)。

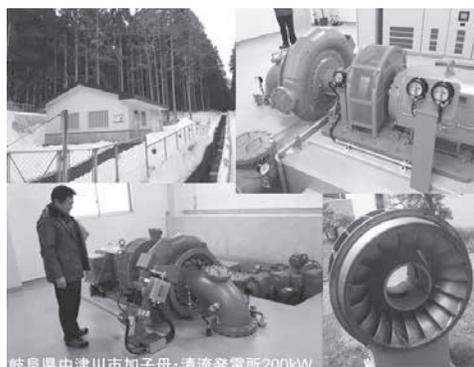
里山の暮らしの体験をするために、地元に住む皆さんのいろいろなプログラムを実践する施設です。ソバを育てて、収穫して粉に引いてソバを食べるといふ講座、山菜を採ったり、畑をやって野菜を取ったりして、その場で料理して食べるという講座、それから炭焼き講座、田んぼを作る市民農園、そういう取り組みがたくさんされています。「すげの里」はこのような活動の拠点施設として豊田市が作った公共施設で、私も設計に参加させてもらい、この里山の資源を使って、その自然エネルギーだけで運営できる、そういう施設にしよう、将来の里山の暮らしのモデルハウスのような、そういうものにしよう、という工夫しました。建物本体もいろいろ工夫して、エアコンがなくても夏冬快適に過ごせるよ



写真4 すげの里

- 建物本体: 高断熱、土壁による大断熱、地中熱利用
- エアコン不要で夏冬快適に
- 太陽光発電(売買取)→電力自給にチャレンジ
- ウッド(薪)ボイラーによる給湯と床暖房→地域の間伐材を利用
- マイクロ水力発電→獣害よけ電気柵の電源
- バイオガス→家畜のふんによる燃料と肥料に
- 木炭ガスによる発電

うにしました。電気は太陽光発電で自給しています。それから薪ボイラーを入れて、給湯と床暖房に利用しています。間伐材の丸太をそのまま放り込めるような大きなボイラーです。さらに、ミニミニ水力発電を入れたり、家畜のうんちやんかをガスにするバイオガスを発生させる装置もみんなで作りしたりしました。それから木炭ガスを発生する装置が奇跡的に残っていたので、それを僕のところの学生が再生しました。昔木炭自動車というのが走っていましたが、そのガスを使ってエンジンを動かして発電するというチャレンジをしているわけです。



岐阜県中津川市加子母・清流発電所200kW

写真5 加子母の水力発電所

それから、これが田口さんの話に出てきた水力発電所です（写真5参照）。こうした水力発電所は実は百

年ぐらい前にたくさん作られたのですが、戦後は全く作られなくなりました。それがまたここ数年で、全国各地で作られるようになりました。これにはFITという固定価格買い取り制度ができたことが、関係しています。そのおかげで作った電力を全部電力会社に売ることができ、それとかなり高い単価で売れるという制度です。この電気を一年間電力会社に売るといくらぐらいになるとお思いですか。一年間に電力を売って、その電力の売り上げは五十万円ぐらいでしょうか、五〇〇万円ぐらいでしょうか、五〇〇〇万円ぐらいでしょうか？答は五〇〇〇万円です。大したものですね。この機械はただで回っていますからね。別に人が張り付いている必要ありません。勝手に水が流れて勝手に電気を作って、勝手にお金を生み出す。結局それが「里山資本主義」です。この自然が持っている価値、それを人間が活用することによって経済的な価値にもなるという、そういう考え方です。こういう取り組みが最近あちこちで目に付くようになりました。ですが問題は、これを一体誰が活用し、管理し、そこで暮らしていくのか、です。こういう資源があるのは分かるけれど、どこも少子高齢化で、さつき森君が言ったよう

に、どんどん集落が消滅しているような状況です。集落が消滅すると、当然そこにある森も水も、管理も活用もできません。では、一体それを誰が担うかということなんです。それは結局、逆都市化、つまり都市から田舎に人が移動して来て、里山を再生するしかありません。では、はたしてそういう人は居るのでしょうか。そんな奇特な人は居るのかというと、意外に居るんですね。内閣府が最近アンケートしまして、都市の住民に聞きました（図3参照）。「農山漁村へ定住する願望がありますか」「ある」と、「どちらか」というと、前回の調査、平成一七年の調査に比べてだ

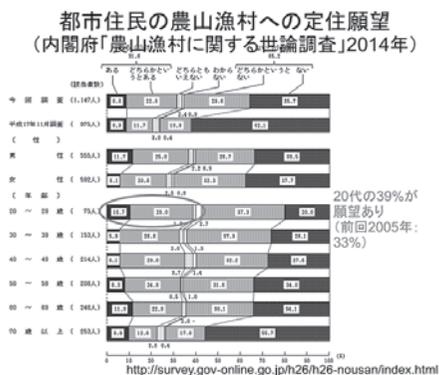


図3 都市住民の農山漁村への定住願望

ぶ増えています。三割ぐらいの人が肯定的で、年齢別に見ると、実は一番肯定的な答えが多いのは二〇代。二〇代の三九パーセントの人が肯定的な答えです。約四割ですよ。これは相当なものですよ。その辺に歩いている若い人たちをつかまえて聞くと、半分近くは田舎での暮らしに興味があるという、そういう時代になったのです。この一〇・七パーセントの人ははっきり願望があると答えておりまして、こういう方が確実に田舎に来ていただければ、田舎の過疎問題はほぼ解決します。この人たちに確実に来てもらえるようにすればいい、そういうことです。実際そういう人が居るのかというと、岐阜県での県と市町村の相談窓口を通じて田舎への移住が実現した実績人数を見てみましょう。二〇〇九年が二十二人十一世帯だったのが、どんどん増えて二〇一二年度は一〇三三人四四八世帯。それから、岡山県の西粟倉村の場合、二〇〇八年から五十人います。長野県阿智村の場合、村役場に若者定住支援センターというのを作りまして、そのセンターが対応した定住人数ですが、これが結構な数です。四年間でなんと一〇五世帯二〇八人。愛知県でも豊田市は、この四年間でやはり六七世帯百六十四人の方が、実際に移住してきてい

ます。

そういう方たちは顔を見るとこんな顔をしています。これは豊田市内に移住された方ですけれども、彼女は豊田のまちなかで生まれた方ですが、名古屋で若い頃——といっても、まだ若いですが——学校を卒業して働いていたんです。その頃はまちの暮らしを楽しんでいたようですが、やはり無理が来て体を壊してしまふ。そのときに、なんかおかしいなと思つて、いろいろ模索する中でマクロビオティックという料理に出会います。それを長野県に勉強しに来ました。それで、「自分でカフェをやりたい」と考えました。田舎——これは本当にすごい田舎です——で、店の隣に野菜畑を作つて、その野菜を取つて料理して出すようなカフェを作りたい、と。さらには、このスペースをいろんなこと、つまりイベントスペースとして使いたい。例えばヨガをやるとか、です。そんなことをやりたいと思つてこの空き家を、彼女は借りました。

豊田市は空き家情報バンクという制度がありまして、空き家の情報を市のホームページで紹介しています。それでマッチングを行います。大体空き家というのはぼろぼろになっていますから、改修しないと住めませんが、豊田市は改修の補助金を最大

一〇〇万円出します。それを使って畳を直そうと思つて、畳職人の人を友達のとつて頼んだら、彼が来ました。この家の前で二人は出会つて、めでたく結婚されました。まだここに住み始めて三年ぐらいですけども、もうお子さんが二人おります。そういう状況ですね。彼は器用なので何でも作るんですが、台所にわざわざかまどを作りました。プロパンガスがちゃんとあるんですよ。ですが、彼女が「プロパンガスはできるだけ使いたくない。循環型のカフェをやりたい」と言うので、彼がかまどを作つて、これでできるものはこれで作ります。それから田舎では、車がないと暮らせません。そこ



写真6 いなかで暮らし始めたワカモノたち

で、SVOといいまして、てんぷら油で走る車を使っています。料理屋さんがてんぷらを揚げた後の廃油をもらってきて、フィルターで濾して、その車を走らせませす。電気も、僕らが調べたら一〇〇ワット生活と言っています。照明と冷蔵庫と洗濯機、ほぼ以上で終わりです。後は携帯の充電だけ、という生活です。大体こういう人たちにテレビはありません。それからエアコンとかももちろんない。電気の暖房などありません。そういう暮らしです。

こういう人たちに「なんでこんな田舎にやってきたの？」と聞くと、大体こういう答が返ってきます。「暮らしを自分たちの手で丁寧によつていきたい」、「お金があまりなくても安心して暮らせる暮らしがしたい」と言います。どういふことかと言いますと、都会で暮らしていると、食べる物でも何でもお金を稼がないといけないので、まずお金を稼ぐ。そこから暮らす。ところが今は、若い人たちにとつてお金を稼ぐこと自体が非常に難しくなっています。長時間、へとへとになるまで働かないとお金は稼げない。そうじゃなきゃ失業者ですね。中間がないんです。もうへとへとになつて働いて、コンビニで晩ご飯、弁当買って食べて、休みの日もグタツとしていふといふ。

そうすると何のために働いているか分からなくなりますがよね。生活というものがなくなつてしまふわけです。そういう中で、体を壊したり、ちよつと鬱になつたり、そういう体と心の不調をきっかけに、何かおかしいなというふうな思つて、いろいろ見て歩く中で、やつぱりきちんとした「暮らし」をしたい。自分の手で食べ物を作つたり、薪を割つてエネルギーを作つたりしたい、と思うようになります。

移住者の中で今はやっているのはもんぺ作りです。古い浴衣とかをほどこいてもんぺを作ることがはやっていまして、みんなもんぺをはいてます、この人たち。それからさらに、最近では下着作りがはやっていまして、ふんどし、女性用のふんどしまで作っています。最近ブラジャーも手作りするようになりまして。そういうことを自分たちの手で丁寧にする。だから、お金はあまり稼げません。しかし面白いのは、彼らに聞くとできるだけお金稼ぎたくなつていふんです。いろいろな逆転現象が起きているのですが、お金を稼ぐために働く時間をできるだけ短くして、あとの時間はこういう手作りでもつていろいろなことをやりたい、自分の暮らしをやつていきたい、だからお金はできるだけ稼ぎたい。

くない、と言ふのです。そうは言つても、もちろん多少のお金はあるので、そういう稼ぎはやつております。例えば、さきほどの彼は畳職人なので、この職人仕事で稼いでいますが、大体月一五万円あれば四人家族が暮らして余裕があります。田舎で仕事がないと言いますが、月に一〇万円、一五万円稼ぐ仕事はあります。就職して九時から五時まで働いて、ボーナスもらつて、という就職口はもちろんありません。しかし、若い人が住みついたつて聞くと、「ちよつと手伝つて」という話がたくさんきまして、案外楽にそれぐらひは稼げます。

別のカップルの話をしますが、二人は田舎に来て出会ひまして、結婚しました。そこで、村の神社で結婚式を上げました。村の人でもそんなことしないですよ。村の人でもまちなチャペルで結婚式をしますが、彼らはこの地で住み続けていくという決意を込めて、この村の小さな神社で結婚式をあげたんです。村の人たち総出で一生懸命準備してお祝いしてくれました。村の神社で結婚式というのが、今移住者の間ではやっています。そんな状況が生まれていふんです。

これまで述べてきたのは、いわゆる「イターン」、縁もゆかりもない人が

田舎に来て住みつくという場合です。ところが、Uターンというのは結構難しいんです。要は親が「都会に出してやる」、「おまえ、こんな所におらずに、ちゃんと都会で大学行って都会で就職しろ」と、言うわけです。

親はそう言った手前、帰って来いとは言えないわけです。子ども親の期待を受けて都会に行っているのに、帰ろうという気は起こらないですよ。だからUターンというのは実は難しい。だけど、まずUターンの人が来て、わいわいやつていると、「あれ、なんかうちの地元って結構いいてるのかな」とかいう気持ちになって、Uターンの人も出てきます。例えば、都会で就職していましたが、辞めて実家に帰ってきて、お父さんがやっていたシイタケ栽培を継いだ若者がいます。彼はドングリの木を伐って、それがまた再生するという、そういうサイクルの中で、シイタケを栽培することをやり始めました。本当は萌芽更新で切り株から芽が出てほしいのですが、大木になった株は元気がなくて、伐っても芽が出ないことがあるんです。彼の伐っている山は芽が出なくて、彼は苗木を植えています。二〇年後には伐つたら株から芽が出るような森にするということ、彼がこつこつと進めています。これが里山再生につながるん

です。それは、こういう人が里山で暮らしを立てていけないとできないことなのです。

最後に、僕がやっている取り組みを一つ紹介します。そういう移住、定住をしたいという人は増えてきました。現実にはやはり非常に難しい。一つは入りたいという人の心構えとスキル、やはり技術が必要です。要は暮らししていくための技術、そういうのを学ぶ場が必要ですし、一方で周りの人がそれを応援する仕組みが必要です。そこで、千年持続学校というのを始めました。これは誰にもESDとか言っています。僕としては、これこそ私がやっているESDだというふうに思っています。まず住む所がないので、住む所を造ろうということで、住まい造り講座を始めまして、みんなで家を造っています。受講料を五万円頂いて、三〇人集まりました。つまり、一五〇万円集まったので、これを資材費にして、あとはみんなに労力はただで提供してもらって、家を造っています。大工さんと建築士さんを講師に招いてやっていますが、彼らもボランティアです。一銭も謝金を払っていません。それで家ができたら、受講生の中から一世帯、実際に移住してもらおう、そういうプロジェクトです。

その活動を通じて、田舎に移住してきたり、移住したいと思ったりしている人たちの話を聞くと、結局、都市の問題が見えてきます。若い人たちが将来に夢や希望を持ってない、高い収入は望めない、お金がないと生活ができない、そうした暮らしに対する不安があつて、その上に自然の恵みがない。それに対して田舎は、今述べた問題を解決してくれ

ます。解決してくれませんが、田舎には田舎の問題があります。とにかく若い人が居ない。ですが、こういう人に移住してもらおうと思つて活動していると、いろいろな問題が見えてきました。まず住む所がない。空き家はたくさんあるんですが、なかなか貸してもらえない。それから、お金はあまり稼げないんだけど、やはり医療とか教育にはお金がかかりますよね。これらの問題をどうクリアするのか、それらを一つ一つ解決しないと、実際には移住はできません。こうした活動を、自分たちも力を付けるし周りも応援するような仕方、やりたいと思つています。

実際に山に入って間伐をしました。間伐をして、山の木をみんなを持ってきて、こつこつ家建てます(写真7参照)。棟上げです。全部手ノコとノミで刻みまして、こういう丸太組みの家を造りました。これみんな

な素人が造ったんです。棟上げのとき餅まきをして地域の人にも、来てお祝いしてもらいました。今では田舎でもあんまりしなくてね。設備は「自然エネルギーで暮らそう」、「そういう暮らしにチャレンジしよう」ということで、電気は太陽光から取っています。電力会社につながっていません。そういうのをオフグリッドって言います。バッテリーに昼間の電気を貯めておいて、夜はこのバッテリーから使うという、そういうシステムでやっています。こうやって苦節三年で、やっと完成にこぎつけました。今月二九日に完成式をやる予定しております。一度来ていただくといいのですが、こんな立派な家はお金出しても手に入りません。そういう素晴らしい家がありました。ちょっと僕としてはうまく出来過ぎたかなと思いますが、今年秋にある四人家族がこの家に移住されます。一世帯しか入れません。受講生の他の人たちはどうかというと、もう待ちきれません。いつできるか分からないので、待ちきれなくて、空き家情報バンクを使って、数世帯の方が既に移住してしまいました。だから、この千年持続学校の三年間の取り組みの中で、六世帯一五人の方が移住するという成果があったわけです。田舎に定期的に通って



写真7 千年持続学校で建設中の家

くるこうした学びの場—まさにESDの場です—、それを持つことがとても大事なんだなということを、私たちもやってみて初めて分かりました。

里山の未来ということですが、移住したい人は増えております。受け入れる側の集落が、受け入れる気持ちさえあれば、つまり、地元がサポートする、そういう姿勢と仕組みがあれば、入りたい人は確実にいます。一方で移住する側は、単に田舎暮らしをしたいというわけでは受け入れられません。その地域に入って、地域づくり、里山再生の担い手になるという、そういう決意と技術を持って入ってきてもらいたいと思います。

このように、今最先端のいろいろなことが里山にある、そういう時代になってきたなというふうに思います。私の話は以上です。どうもありがとうございます。